

令和 2 年 9 月 28 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2019

課題番号：15K02562

研究課題名(和文) 古代日本語の活用助辞成立に介入する動詞および助辞の役割に関する歴史文法学的研究

研究課題名(英文) Historical Study on Verbs and affix in Old Japanese

研究代表者

釘貫 亨 (Kuginuki, Tooru)

名古屋大学・人文学研究科・教授

研究者番号：50153268

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、奈良時代語と平安時代語を包摂する日本古代語の最大の変革要因が動詞の増殖にあると仮定して自他対応をはじめとする派生と動詞の形容詞転成とに分けて、詳細な検討を行った。

その結果、動詞の形容詞転成すなわち分詞用法が極めて大規模に発達し、本来の形容詞が構造的に有する語彙不足を十分に補って、日本古典語の体系を最終的に作り上げたことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来日本語文法論および日本文法史の分野において、動詞の形容詞転用すなわち分詞用法の解明が等閑に付される傾向があり、本研究は古代日本語における分詞用法が「行く水」「咲く花」「立つ鳥」等の無標識の絶対分詞を起点にして、「咲きたる花」のような過去分詞、「咲ける花」のような現在分詞に展開する定率関係を構成することを明らかにした。現在分詞と過去分詞に対立する欧語文法に対する日本語文法の特徴を解明した。日本語の分詞用法の発展は、主として万葉集や源氏物語を中心とする文芸作品における表現の発達を通じて実現したと考えられ、日本文芸史との有機的な連関を解明するための有意義な材料を提供しうるものである。

研究成果の概要(英文)： This Study has been done with comparing derivation and transformation of verbs in old Japanese, Nara period and Heian period. I have had a solution about participle that had developed on a large scale in old Japanese.

研究分野：日本語学

キーワード：自他派生 形容詞転成 無標識絶対分詞

## 1. 研究開始当初の背景

日本語文法史研究は、昨今非常に盛んにおこなわれているが、おおくは構文構造を対象に下統語論を中心に行われており、形態論に立脚した通時的研究は、釘貫の研究を除けば、阪倉篤義以来、数十年間停滞している。奈良時代語に関しては、平安時代語との連続があまり自覚されておらず、奈良時代語研究は、旧態のと古典学的文法と大差なく、通時論的観点が存在しなかったと、いいようであった。もっとも典型的なのは、動詞自他の対応が異なる三つの類型を持っているにもかかわらず、これ自体が相対化されることなく自明の前提として扱われていた。釘貫の研究によってはじめて、これらの類型が歴史的諸関係の結果生み出されたものであることが議論の対象となったのである。奈良時代語文法史研究のかかる停滞的現状を打開して、用言の派生、転成を手掛かりにしてその通時的展開に関する研究が要請されていた。本研究は、これに応えるものとして立ち上がった。

## 2. 研究の目的

本研究は、古代日本語の最大の变革要因として、動詞の派生と転成に注目して、特に状態自動詞の大量生産が、形容詞語彙の不足を補う形で実現したことを明らかにしたものである。

古代語動詞増殖の基本的な造語法である派生とは、たとえば自動詞と他動詞の形態的対応に見られる。知る四段多動一下二段自動、寄る自動一寄す多動、懸く他動一かかる自動、等のように、既存の単語を文法的意味から連想して新しい単語を作り出してゆく方式である。これが古代語増殖の最初の段階で行われた。派生については自他のほか、住む一住まふ、語る一語らふ等の作用継続がある。次いで、堅ム、求ム、緩ム、かしこム等の語幹と語尾が分析的な語構成による動詞が盛んに作られたが、平安時代語に多量出現した、野分だつ、愛敬づく、今様めく等の接尾辞動詞は、語幹語尾の分析的な語構成を持つ点で、奈良時代の語尾動詞の後継である。とりわけ平安時代語の接尾辞動詞の大部分が状態性自動詞であり、特異な偏りが注目される。本研究はこの点に注目して、多量の接尾辞動詞の自動詞偏重が古代語形容詞着の慢性的不足を補う形で造語されたことを明らかにした。併せて古代語形容詞がク活用シク活用という特定の形態に縛られていた故に、形容詞が形容詞を生むという効率的な造語システムが欠如していたことを論証した。

## 3. 研究の方法

本研究は、古語動詞の増殖が自他対応のような派生から動詞の形容詞的用法ともいべき分詞に展開したことを実証的に明らかにした。特に日本語動詞の分詞構造が「咲く花」「咲ける花」「さきたる花」のような無標識絶対分詞・現在分詞・過去分詞という鼎立関係にあるという特徴を有することを論証した。本研究は、古代日本語の際だ愛の变革要因が、動詞の増殖過程にあると考え、その仮説の正統性を明らかにした。古代語の動詞増殖は、自他、作用継続のような語幹増加型のアメーバ的増殖から、語幹と語尾が分析的、離散的な語尾、接尾辞動詞へと全面的に展開したことを万葉集、古今集をはじめとする和歌集、伊勢物語、源氏物語のような散文文芸を主資料として大規模調査を行った。上記のような動詞造語の通時的趨勢は、このような諸資料を調査して明らかにした。

本研究は、古代語の動詞増殖のもう一つの柱として、動詞の形容詞転用である分詞用法に注目した。古代日本語の分詞は、「咲く花」「飛ぶ鳥」「行く水」のような形態的標識のない、また過去分詞や現在分詞のような時制の制約のない無標識絶対分詞というカテゴリーを起点にしているところに特徴がある。無標識絶対分詞を起点にして、例えば「咲く花」「咲ける花(現在分詞)」「さきたる花(過去分詞)」のように放射状に展開するのである。今確認している日本語動詞の分詞体系は、三者鼎立であるが、今後、より複雑な構造が見つかる可能性がある。

## 4. 研究成果

本研究が明らかにしたのは、古代日本語に一貫する動詞増殖過程の論理と趨勢を明らかにしたことである。すなわち、古代語の語彙のうち一貫した体系的な造語システムを有していたのが動詞のそれであることを初めて解明した。最初の段階が語幹増加型の肥大系、語尾、接尾辞付接による離散系が発達し、その最終的な傾向が状態性自動詞の産出にあったことを突き止めた。それらは、形容詞と親和性を持つ動詞群であり、古代語において形容詞増産が特異な伝達要求を持っていたことが分かったのである。それは、動詞用法の別の側面である分詞用法において顕著に観察された。分詞は従来欧語文法の特徴としてわが国でも知られたものであったが、これが日本語においても観察される事実であることを本研究は解明した。日本語の分詞は、絶対分詞・現在分詞・過去分詞という鼎立関係を構成する点において、過去・現在の対立関係を基軸とする欧語文法よりも複雑に発達している可能性がある。

上記の目的と方法を踏まえ、当初の計画の通り余すところなく論文として公表することがで

きた。それらの論文をまとめて著書『動詞派生と転成から見た古代日本語』（2019、和泉書院）を本研究費の範囲内で出版した。出版物まで通常の科研費の枠内で実現できたことは、思いがけない成果であったと考えている。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 4件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 釘貫亨	4. 巻 1
2. 論文標題 動詞派生と転成から見た古代日本語	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 和泉書院	6. 最初と最後の頁 1-252
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 釘貫亨	4. 巻 37
2. 論文標題 奈良時代語における話者願望マクホシをめぐる通時的諸相	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 国語語彙史研究	6. 最初と最後の頁 1頁～17頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 釘貫亨	4. 巻 221
2. 論文標題 上代語活用助辞ムの意味配置に関する統語構造	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 萬葉	6. 最初と最後の頁 44頁～56頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 釘貫亨	4. 巻 136
2. 論文標題 上代語における意志・推量の助辞ム成立の歴史的関係	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 訓点語と訓点資料	6. 最初と最後の頁 1頁～10頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----